

小野 穎子 氏

元・丸三タオル工業協同組合デザイナー

現・ギャラリーCHUCHU 代表

タオルにもデザインカやファッション性が重要になってきた 1960 年代、タオルメーカー専属のデザイナーはまだ珍しかった時代に、今治で女性初のタオル・デザイナーとして丸三タオル工業協同組合に入社。大勢はデザインより量を優先するなかで、ファッションとはほど遠かったタオル業界に新風を吹き込むべく孤軍奮闘。入社後は男性顔負けの多忙な日々を過ごし、青年時代をタオルのデザインに注ぎ込んだ小野氏。その功績は大きく、後世に引き継がれている。




小野 穎子 氏



おの・えいこ ☆ 1942 年満州生まれ。帰国後、越智郡大三島の上浦町（現・今治市上浦町）で幼少時代を過ごす。小学校 6 年生から島を離れ今治市立日吉小学校に転入。1961 年 3 月に愛媛県立今治北高校卒業後、女子美術大学短期大学部造形美術学科に入学。1963 年に同大学卒業後、1 年間日本デザインスクール専門コースに在籍。1964 年 4 月より丸三タオル工業協同組合（丸三タオル㈱）デザイン室に入社。1968 年 8 月に独立し、テキスタイルデザイン工房「アトリエ CHUCHU」創立。1990 年に職業訓練指導員の免許を取得し、1991 年 4 月より愛媛県立今治高等技術専門校デザイン科非常勤講師に就任。特技は、油絵やデザインなど絵画全般。

1. 幼少時代

週末はポンポン船に乗って父親に会いに行くのがお決まりだった

1942年、小野穎子氏は中国の満州で生まれた。小野氏の名前「穎子」は、満州の栄口で生まれたことから、両親が名付けた名前である。父親が大学を卒業して大連汽船(株)  に勤務していたため、小野氏は5歳になるまで満州で過ごし、終戦後の1947年に父親の故郷である大三島にやってきた。小野氏の旧姓は菅^{かん}と言うが、菅の姓は大三島や西条市などに点在する。梅本紋を家紋とする菅家は菅原道真の末裔とされ、その由来は諸説ある。小野氏の実家は9代つづく歴史を持つが、しばらく誰も住んでいないため現在は更地になっている。

小野氏には、兄1人（^{あきら}巨氏）と弟2人（次男宏氏、三男^{まこと}信氏）がいる。父親が満州に赴任するとき、長男はすでに大三島で誕生していたが、病弱だったために医師をしていた祖父に託され、両親だけ満州に渡った。祖父が「この子を満州に連れて行ったら、絶対に死んでしまう。長男で跡継ぎだし、連れて行くな」と両親を説得し、長男は祖父のもとで育てられた。

小野氏と次男は満州で生まれ、三男は両親が帰国する際に母親のお腹にいた。一家の帰国後、母親は、長男を残して満州に渡ったことをたいそう後悔し、「絶対に子供を手放してはだめ」というのが口癖になった。それもそのはずで、小野氏が長男と初対面した5歳のときの記憶では、長男はいつも祖父の後ろに隠れて両親や兄弟のところには寄り付かなかったそうである。

小野氏は、大三島の上浦町立瀬戸崎小学校に入学した。小学校と中学校が隣接しており運動場を共有していたので、校庭には7歳から15歳までの学生が入り交じり毎日賑やかであった。



上浦町立瀬戸崎小学校

そんな瀬戸崎小学校での学校生活は5年生までで、6年生から今治市立日吉小学校に転入した。教育熱心だった父親の影響で、高校進学準備のために中学校3年生だった長男の今治行きが決まり、それに合わせて母親と下の3人の子供たちも本島に生活の拠点を移したからだ。あまりにも突発的な出来事であり、瀬戸崎小学校の友達と別れの挨拶もできないほど急な引っ越しだった。父親は、地元の愛媛県立大三島高等学校で社会と英語の教員をやっていたため島に残った。高校での社会と英語の他に、寺子屋のようなスタイルで数学を夜間に教えていた。こうして、週末の土曜日になると、ポンポン船（朝日丸）で2時間余りかけて父親に会いに行き、日曜日は父親が今治にやって来るといふ、菅家の生活が始まった。



大三島で過ごした小学生の頃




信氏、従弟の山崎義幸氏（前列左から）

小野氏、宏氏（後列左から）

小野氏は、今治に住んで間もない頃、ひとつだけ慣れないことがあった。それは家の大きさである。大三島に住んでいた頃の家や庭は広々としており、一家は贅沢な空間のなかで生活できたが、今治の家は小さな賃貸アパートだったので、最初そのギャップに慣れなかった。急な引っ越しで十分な物件を見つける時間がなく、生活道具も大三島から十分に搬入できなかつたので仕方なかった。とにかく5人が生活できるように部屋を2つ借りて、母親と小野氏、そして兄弟3人に分かれて寝泊まりした。

今治市立美須賀中学校をへて愛媛県立今治北高等学校に進学した小野氏は、美術部と新聞部に入部した。小野氏の絵に対する関心は、小学校4年生のときに愛媛県の子供絵画県展で優秀賞をもらってから徐々に高まっていった。表彰式は日吉小学校でおこなわれ、先生に引率されて行ったことをはっきりと覚えている。このとき、その2年後に日吉小学校に転入するとは露ほども想像できなかつた。

日吉小学校に転入してすぐに叔母の紹介で高階重紀  氏の子供教室に入り、毎週土曜日に絵を習いに行った。「ここはたいへん良いね、ここはこうした方がよいよ」と言って必ず一カ所は褒める高階流指導方法は小野氏に心地良く、大学受験まで指導を受けた。




家族写真（1966年撮影）

父の重祇氏、母の清香氏（前列左から）

次男宏氏、小野氏、三男信氏（後列左から）

2. アート漬けの東京生活

夜の銀座はネオンがキラキラ、ゆらゆらしてとてもきれいだった。だから、ネオンデザイナーを目指そうとおもった。

1961年、女子美術大学  短期大学部造形美術学科に入学した小野頼子氏は、ここで油絵中心の洋画の基本を学んだ。女子美大の学生は着るもの、やること、すべてにおいて個性的で最初は圧倒されたが、そのうち小野氏も自然と馴染んでいった。大学進学後、初めて帰郷して会った友だちが度肝を抜かれたのも無理はない。小野氏も気付かないうちに、女子美大生タイプの芸術家になっていた。

東京では、父親の「下宿しろ!」の一声で下宿生活を送った。20歳前の娘が東京でひとり暮らしをするとなると入寮をすすめるのが普通の親であるが、小野氏の父親は違った。その理由は、「集団的な物の考え方になってしまい個性が生まれにくい」というものだ。そもそも女子美を選んだ理由も、「これからの女子も手に職を持って、どんどん活躍する時代になる」と言った父親の示唆であった。

最初は、高円寺の知人宅の敷地内にあった2部屋のうちのひとつを借りて住んだ。3畳一間のトイレ共有のアパートだった。その後、高田馬場で一人暮らしをしていたその知人の娘さんから一緒に住もうと誘われ、現代風で言えば、シェアハウスでの生活をしばらく送った。その娘さんは踊りの師匠をしていたので、生活スタイルは規律正しく厳しかった。そして、弟の宏氏が大学受験で上京するタイミングで高田馬場から阿佐ヶ谷のアパートに引っ越しをし、姉弟の共同生活が始まった。1階が大家さんで2階がアパート。隣の部屋には沖縄出身の姉弟が住んでいて、姉弟同士の共同生活で共通する点が多く、仲良く過ごした。

一方で、弟とはしばしば揉めた。弟は受験生で静かに勉強。小野氏はデザイナーになるために技能実習。弟との共同生活は小野氏が日本デザインスクールに在籍していた時期と重なり、小野氏は帰宅

後もデザインの勉強をつづけていたが、たとえば、トレーシングペーパーを使ったトレースの練習でシャリシャリと音を立てると、弟と喧嘩になった。仕方ないので小野氏は近くの喫茶店に行ってトレースの練習をするようになったが、毎回一杯80円のコーヒー代を払っていると知った弟は、「そんなところに行ったらあかん」と言って譲歩し、姉のデザイン学習の傍ら、我慢して勉強するようになった。

短期大学部を卒業したのち4年制へ編入もできたが、油絵では就職は難しいし、その頃デザインに興味を持ちはじめていたので、学生や社会人などが通うデザイン専門の日本デザインスクール専門コースに1年ほど在籍し、デザインを本格的に学んだ。デザインの勉強はさまざまであったが、基本的にいちどデッサンしたものを解体して抽象化していく技術の修得である。女子美大に入学してからずっとアート漬けの生活を送ってきたが、小野氏にとって油絵よりもデザインの方が面白かった。

大学時代にしばしば遊びに行った銀座は、ネオンがキラキラ、ゆらゆらしてとてもきれいだった。とくに、雨の日はひと際美しかった。この情景が小野氏にネオンデザイナーになる夢を与えた。しかし、この夢を女子美大の先生やスクールの講師に相談したところ、建築学の知識も必要だと言われ、数学が苦手だった小野氏はネオンデザイナーなることを断念した。しかも、二人の弟が大学進学を目指しており、親への負担を考えると余計にそうだった。そして、いったん今治に帰って仕切り直しを図ろうと考え、1964年に帰今する。（次号につづく）

